夏至祭の花冠

山本　水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏至祭の花冠

【Ｎコード】
Ｎ３１４９Ｎ

【作者名】
山本　水城

【あらすじ】
レイ・イシ＝スは、諸国から「楽士（キサ）」と呼ばれる皇領アルシングの公職である造幣職についている。
レイの亡き兄の友人で幼馴染であるエイナル・シガー＝スは、歴代最年少で神祇長の役職にある。人格者であり有能なエイナルに、レイは幼い頃から尊敬と憧れの念を抱いていた。レイも順調に昇進し、キサ鉱石の鉱床のとある区画の管理を担当することとなる。皇領アルシングの富の象徴であるキサ鉱石ではあるが、アルシング国民にとって、実は謎の多い産物であり、詳細を知る者は多くない。

シズレグはレイにある秘密を有しており、死に際し、そのことがレイに知られることがないよう、エイナルに託していた。
エイナル自身も、さまざまな問題を抱えていた。
近々に神事を執り行う「ヴェーヌ」の選定が迫っていた。
あわせて王軍を率いる神祇長として、キサ鉱石の取引をめぐる周辺諸国の不穏な動きに目を光らせる心休まらぬ日々を過ごしていた。
そのためかエイナルは繰り返す夢によって、眠れぬ白夜を過ごしていた。
名前を思い出せない誰かが、懸命に「イシス」を呼んでいるという夢である。

uvertyr－序曲－

エイナル・シガー＝スの衣は、遠目には墨色に染め抜いただけに見える簡素なものであった。だが歩を進めるごとに翻る裾からは、さすがは神祇長たる者の衣、キサの箔と白金の刺繍を施した内布がのぞき、夏至を目前にした午後の日射しを受けるたびに輝きを放った。

「最高会議（ヴィーク）」が散会し、高さ八キュビドはあろうかという両開きの大扉から出席者があふれ出てきた時、先のヴァルボリの夜に造幣従士職少従へ昇任したばかりのレイ・イシ＝スは、議場から少し離れた回廊の奥に佇んでいた。

墨色の衣を纏ったエイナルの姿は、すぐにレイの目にとまった。それは、長身の多い皇領アルシングの男たちの中でも、エイナルの身の丈がとりわけ抜きんでていたためでもあったし、さらにはエイナルが、淡い色の髪が圧倒的に多いこの国の人間の中では大層稀有な、新月の夜空を思わせる黒髪の持主であるせいもあった。

神祇長エイナル・シガー＝スは、「ヴィーク」出席者の中で最年少であるだけではなく、歴代の神祇長の中でも、最も若くしてその重責を担うこととなった精鋭中の精鋭であった。

それに加えて、レイが行政官となってこのかた、目の当たりにしてきたエイナルの活躍ぶりは、噂に聞いていた以上に目覚ましく、幼い頃から彼を兄と慕ってきた間柄であるにもかかわらず、今では、エイナルに気軽に声を掛けるのをためらわれる程であった。

そんなレイの視線の先で、エイナルは、同じく会議（ヴィーグ）の出席者であった造幣長ムース・クリスチャナ＝ドを呼び止め、低い声で立ち話

を始めた。

レイの上司であるムース・クリスチャナ＝ドは、ハシバミ色の豊かな髪を編んで、それを月桂樹の冠のように頭に巻きつけている。

その髪のきらめきは、造幣職の象徴である光沢ある青のマントと見事な調和を見せていた。

ムースの物ほど上質なツヤはないが、レイの衣もまた、鮮やかな青である。

皇領アルシングでは、官吏たちは職によって異なる色の衣を身に纏う。

造幣職が身につけるのは青衣であった。

その色はヘリス山麓のヴァッテン湖畔で、空と水の反射を受けて輝くキサの色を模したものだと言われている。

そしてこの青は、造幣職成立当初からの職務であるキサ鉱の管理権を表すものとして、行政官職の衣の中でも、最も歴史と由緒のある色のひとつであった。

さて、造幣長ムース・クリスチャナ＝ドは成熟した女性で、歳の頃は三十五を過ぎたあたり、すでに三人の子をなしていた。

しかし、肢体は依然としてはずむように豊かで、その言葉は常に知性に輝いていた。

そして、何よりも、彼女の眼は滑稽と洒落をこよなく好む人懐こい色を帯びており、それは対話相手を知らずなごませた。

このためか、ムースは、歴代の造幣長が必ずといっていいほど悩まされてきた国庫にまつわる黒い噂の類を、これまで一切、寄せ付けることがなかった。

エイナルがムースに背をかがめて語りかける様子を見ていたレイ

は、胸中にざわめくものを感じていた。
「ムース・クリスチャナ＝ドの造幣長に就任に当たっては、その頭脳の優秀さと同じ程、美しさもまた役立ってきたに違いない」などという、蜂蜜酒（ミード）の酔いで理性が鈍った官吏どもが、宴席でしばしば口にする下世話な噂話を思い出したのだ。

レイがふと気づくと、両長官の話は終わっており、神祇長エイナル・シガー＝スは、その髪と同じく黒い瞳をレイに向けていた。
まるで、レイがずっと自分の姿を目で追っていたことなど先から知っている、といった様子だった。

我にかえったレイが足を踏み出すよりも早く、エイナルの方から近づいてきた。
皇領アルシング特有の日差し、深夜から夜半までほぼ一日中、全ての物に影を長く落とし続ける夏の日差しが、エイナルの目もとに濃い影を生んでおり、レイは、歩み寄ってくる彼の表情をうかがい知ることができなかった。

「造幣従士レイ・イシ＝ス」
エイナルのレイへの呼びかけは、ごく事務的であった。
レイは神祇長への尊敬の証しとして、すぐさま身を深くかがめてから口を開いた。
「拙宅の『夏至の杯』へお運びいただきたく、ご挨拶に伺いました」

官吏たちは通常、両腕を後ろに回し身をかがめる。
これがアルシング王と「ヴィーグ」に対する公僕としての忠誠の証であった。
しかし、造幣職だけは左の手を胸に、右の手を折った膝に当てる。
その意味するところは「常に両の手に隠すものなし」であると伝えられている。

エイナルはすぐさま墨衣の左袖を軽く振り、レイの敬礼を解かせた。そして、招待への返答として右腰に帯びた剣の柄を叩いた。

「歓びの謡（うた）とともに貴殿の角杯を受けよう、従士イシ＝ス」とレイの招きに応じると、さらにエイナルは続けて言った。

「面と向かいあうのは久し振りだ、レイ」

やや語調を緩めたエイナルの声を聞き、レイのこわばっていた肩と心がわずかばかりほぐれた。

「『女神ルースの日』以来です、神祇長」

敬礼からは直ったものの、レイは視線を上げきれず、墨色の襟からのぞくエイナルの喉元に控えめに目をやった。

「『ヴァルボリの夜』にも会っている。少従昇任の挨拶をしてくれた」

エイナルのこの言葉に、レイは軽く唇を噛んだ。

何しろ今年の従士昇任は全職で百人近くおり、挨拶といったところで、各職長の前をただ順に通り過ぎただけだった。

レイにとっては、エイナルと顔を合わせたという認識など、とても持てるものではなかったのだ。

「……新調しなかったのか？」

「……？！」

「上衣だ。従士職に昇任したというのに」

「これは……まだ十分に用をなしておりますゆえ」

レイの返答を聞き、エイナルは左目を軽く見開いた。レイにとっては懐かしく、良く見知ったエイナルの癖だった。

そして、エイナルは軽く口の端を歪めながら、

「『簡素にして充足を知る』か。造幣職の鑑だな」と造幣職奉職第一の心得を挙げて見せた。

からかわれているのだろうか？　レイは戸惑い、思わずエイナルの顔まで視線を上げた。

すると、エイナルは瞬時にそれを捉え、漆黒の瞳でレイを見つめ

返した。
「だが、どうだろう、衣を新たにするのに、時宜が悪いということもあるまい？」
口調は堅苦しさを取り戻していたが、エイナルの瞳が微かにいたずらめいた光を放っているのを、レイは見逃さなかった。

その時、副官がエイナルの背後から呼びかけた。
副官の方に振り返り、ゆったりと頷いてみると、エイナルは再びレイに向き直った。
「もう少し明るい青の方が、お前の瞳の色に映える」
そう言い置き、墨色の裾をわずかに翻して、エイナルはレイの元を離れていった。

レイは、しばしその場に立ちすくんだまま、遠ざかっていくエイナルを見送った。
エイナルの姿は、まるで金の髪と色とりどりの官吏の衣がきらめく浪間を悠然と進む、黒い大きな竜骨船のようだった。

キサの白夜　（1）

ヴァルボリの夜から収穫月の満月まで。
その間、わずか三月半。

諸国から「楽土（キサ）」と呼ばれるこの国、皇領アルシングにおいて、その呼び名に最もふさわしい季節は、わずかこれだけの間に過ぎない。

確かに、それは夢のように美しい季節だ。

日差しは、絹の金糸のように降り注ぐ。
低く柔らかくさしこんで、昼のような明るさが夜半までも続く。
民は永遠に続く微睡みのような午後、ミードや麦酒（エル）を酌み交わし、草原に寝そべった。

夏の日射しを浴びておくのだ、存分に。

じきに太陽は閉ざされ、明けない夜が果てしなく続く季節がやってくる。

このようなアルシングの夏も、行政官にとっては、むしろ身の安まることのない季節だった。
なんといってもほぼ丸一日、明かりをともすことなく職務が果たせるのである。
それこそ陽の差さない冬の分までもだ。

そして、昨今は果たすべき職務の方も尽きることがなかった。

その日も、レイ・イシ＝スが仕事を打ち切ったのは、深夜近くになってからだった。急に文字が読みにくくなった事に気がつくまで、レイは時間を忘れて作業に没頭していたのだ。

部屋にはもう誰もいなくなっていた。

家への道すがら、レイはふと湖畔の柳に目をやり、少年の頃、従兄妹たちと競って水面に飛び込み遊んだ夏の日を思い返していた。

だが、思い出に浸って足を止めたのは、そう長い時間ではなかった。

この黄金のような夕暮れは、すぐに短い闇夜に沈むだろう。

明かりの準備はしていない。日のあるうちに帰りつかなければ。

レイは家に向って足を速めた。

家に入ると、義姉のオーサが針仕事の道具を片付けているところだった。

「レイ、またこんな時間まで」

疲労の色をにじませているレイの表情に目を留めたオーサは、たしなめるようにこう声をかけた。

オーサを娶ったのは、レイの歳の離れた兄、シズレクだ。

だが婚姻後ほどなく、兄は妻を残して死んだ。

彼らの間に子はなく、オーサがいずれ別の男に娶られるであろうことは、誰もが予想していた。

だが、夫を亡くし随分と経ったが、彼女は、いまだにここを離れようとはしないのだった。

「少しは日にあたって、ゆっくりしないといけない。こんなに顔が青白いのでは、冬に凍えてしまう」
オーサはそっとレイの頬に触れた。
まるで母が幼子に接するようなオーサの態度にも、レイは特段気分を害することはなかった。
レイの母は出産後、すぐに没しており、一方、オーサはというと、レイが物心つく頃には、この家にいたのだから。
「従士職に昇任して忙しいんだよ、義姉(ねえ)さん」
レイは空色のマントを脱ぎ、衣かけに置いた。

オーサは、それ以上レイに話しかけることなく、台に椀と匙を置き、角盃にミードを満たした。
オーサが食卓を整える音だけが、静かに響いている。

父はもう寝入っているのであろうか？

だが、レイはオーサにはなにも尋ねず、黙ったまま席についた。
オーサが蝋燭に火をともす。
ミードが入っているのは山羊角の筒盃だ。それは元はと言うとシズレグの物であった。
兄とオーサは、婚姻のミードをこの角盃でかわしたと聞いている。

自分もその婚礼の席にいたのだそうだが、二人の婚礼の記憶は全くなかった。
幼かったからとはいえ、そのことを何一つとして思い出せないのは奇妙なことだと、常々レイは思っていた。

オーサはレイの前の席に座り、レイが黙々と匙を口に運ぶのを静かに眺めていた。
時折、蝋燭の炎に引き寄せられる、小さな羽虫を、オーサが手で

扇ぐように払う。
　そのたびに、薄暗い部屋の壁と天井に光のさざ波が立ち、揺らめき、そして静まった。
　こんな風にして、レイにとってごくありふれた夏の日が、また一日暮れていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3149n/

夏至祭の花冠

2011年11月15日19時49分発行